

文化の輸送



© Yuki Nakase

『バランシン・ザ・シティ・センター・イヤーズ』観劇後に歩いたパークアベニューにて

今年のニューヨークの紅葉は例年よりも彩度高かった、と写真が趣味のバレエダンサーが言いました。メープルの紅い葉は枝の先で絶頂まで鮮やかさを増し、その後一週間ですべて散りました。どんなものにも終わりがあるのだなと少し切なくなっていると、その隣ですでにたくさんの冬芽が静かに来春を待っているマグノリアの木に慰められました。今年初めて雪を見たのは11月の初めです。寒さが厳しくなればなるほど、室内の催し物がより楽しく感じ、「外はこんなにいい天気なのに、今日も一日暗闇で仕事か」とガッカリせずに済みます。

アメリカのこの時期はホリデーシーズンで、10月のハロウィンを皮切りに、11月のサンクスギビング感謝祭、12月のクリスマス、そしてニューイヤーと、年越しまでずっとお祭り気分です。私を含む庶民レベルから見たホリデーの印象は、ハロウィンの仮装、感謝祭のご馳走、そしてクリスマスの買い物といったところでしょう。近年のネット販売など流通の変化により、特定の地域でしか手に入らない物産がどんどん減っているように感じます。そんな中、今でもアメリカらしさを一番感じられるのは、感謝祭のご馳走でしょう。土地に根差した食文化だけは、構成するすべての要素をそのままパッケージ化して輸送するのが難しいのかもしれませんが。地元の食材を用いた料理のできたてを、その土地で仲間と一緒にいただくのが一番おいしく感じ、「感謝祭」の名のとおり、私たちを支えてくれている自然と他の生き物と社会に感謝する気持ちが食を通して生まれます。

私は舞台作品も食文化を同じように、パッケージ化して輸送することが難しい芸術だと感じています。何より劇場の作りがそれぞれの土地によって違うのが、作品に大きく影響するでしょう。「あの劇場がよかった」「あの劇場は散々だ」と私たち旅芸人は勝手に

あれこれ言いますが、演者からよく聞くのは控室の大きさと袖の広さの違い、照明デザイナー同士では吊り点の数と高さについてよく指摘します。ただ、それらは制作側で何とか工夫して、劇場の特徴を隠したり生かしたりすることが可能かもしれません。しかし、制作側でなかなか変えられないのが、オーデトリウムです。オーデトリウムの違いは音、光、装置の視点からさまざまな論点が考えられますが、客の姿勢を変える客席の傾斜角度が、客と舞台作品の関係性を変える最大の要因と考えられます。もちろん前の人の頭で舞台が見えない、また座席前のスペースが十分でなく2時間座り続けるのが不快な客席は論外ですが、理想的なのは、上演中に客が作品にどんどん惹きつけられ自然と前のめりになれる傾斜です。客が背もたれにどっしり寄りかかっている姿勢では作品に参加しづらいでしょう。舞台芸術においては客も作品に影響を及ぼす要素の一つであり、作品の是非に関わらず、舞台からの問いかけに客が応じ、客席から無言のエネルギーを舞台に投げ返すといった力関係が観劇の魅力です。

この秋も素晴らしい観劇経験をしました。なかでも、ニューヨーク・シティ・センターで行われた毎年恒例秋の『フォール・フォー・ダンス』と、アメリカのバレエ団に加えマリンスキー・バレエ、ロイヤル・バレエやパリ国立オペラを含む超一流のバレエ団により、ジョージ・バランシンの作品ばかりを上演する『バランシン・ザ・シティ・センター・イヤーズ』が印象的でした。どちらもフェスティバルなので照明図面はすべての演目で共通なのに、どの作品もとても個性的でした。同じ人間が世界でまったく違うように考え表現する事実を、楽しく共有できる舞台に感謝します。今年も一年間、ここに執筆させていただきましたことを、心より感謝申し上げます。来年も、どうぞよろしく願いいたします。